

みぞの ともこ  
**溝口桃子**記者  
(伊那市4年)



### たくみのわざのツル

名人に、水引で作るツルの実演をしてみました。作ってくれたのは、関島康弘さんです。羽根のふんばりは、さいしょは丸いけれど、さいごに細長く整えます。頭の部分には、私たちが体験したあわじ結びの小さいものを、すこい速さで作って、のせていました。たくみのわざだと思いました。

じま 大地  
**上島大地**記者  
(安曇野市3年)



### 人と人を結ぶ力

水引を作るには、たくさんの作ぎようがあります。手作さようで作る場合、お客さんのちゅうもんしだいでどんな色でも作れます。はけに顔料を付け、一つの面に2回ぬり、ひっくりかえして、また2回ぬります。きかいでも同じものができますが、手作りの方がつかいやすいと言ってお客さんのために、作っているそうです。こんな風に、きかいや人の手で作られている水引には、人と人を結ぶ力があるんじゃないかなと思いました。

くしほ 立冬  
**榎原立冬**記者  
(木曾町6年)



### 水引のひみつはびっくりの連続

水引は、切れるとめでたくないので、じょうぶに作りまします。強さ(こし)を出すため、手作業でのり付けをする水引もあります。こののりは、クシイ粉という粉と、海でつかう作ったのりを混ぜてあります。のり付けも、この後はけで色付けも、とても大変だそうす。顔料のりが早くかわくよう、この作業をする「はき場」には、たくさんのせん風機があります。何気なく見ている水引のひみつ、びっくりの連続でした。

みぞの かいと  
**溝口開人**記者  
(伊那市6年)



### 水引は人の心を結ぶもの

水引は、包み紙などを結ぶことに用いられますが、人の心を結ぶものでもあります。結び方は、大きく分けて2つあります。「つは」「結びきり」。結婚や弔事、病氣見舞いなど、二度とくりかえしてほしくないという思いから、ほけなないように結びます。もう一つは「花結び」で、入学式など、何度でもくりかえしてよいお祝いに使います。ほけなく、気持ちを伝えることができ、素晴らしいと思います。

「ちいさいモモちゃん」という本を、小学生のころ何回も読んでいました。



「モモちゃん」という赤ちゃんがだんだん大きくなって、「アカネちゃん」という妹ができて、小学生になっておねえちゃんとして成長していくお話です。

私も妹が一人いるおねえちゃんでした。おねえちゃんはいろいろとがまんしなければならぬことがあり、お母さんから怒られることが妹よりも多いような気がします。おねえちゃんだから、妹の世話もしなければなりません。そんな自分のこと、「モモちゃん」の姿を重ね合わせたのか、この本が大好きでした。

モモちゃんの物語は全部で6冊あります。最後の「アカネちゃんのなみだの海」ができたときは、1961年に最初のお話を書いたから約30年たっていたんだそうです。

私は最後の本を大人になってから読みました。その時になって、なるほど、と分かったことがたくさんありました。

「ちいさいモモちゃん」  
「アカネちゃんのなみだの海」

本の  
と  
び  
ら

モモちゃんの本は子ども向けなのに、時々こわい話が出てきます。パパが「くつ」だけ帰ってくるとか、死神がママをたずねてくるとか。子どものころは、ふーんこわいなあと思っていただけなのですが、大人になって読んでみると、それはパパとママがけんかをしていて、後に別れて暮らすことになり、最後にはパパが亡くなってしまってお話だったことが分かりました。著者の松谷みよ子さんによると、このお話は自分のこどもたちが小さかったころのことを、子どもたちに伝えるように書いたのだそうです。そのころとしてはまだ少なかつた働くお母さんならではの話もあります。モモちゃんを「あかちゃんのうち」(いまの保育園)につれていった話とか、仕事で忙しくてお迎えの時間に間に合わなかつた話も、モモちゃんのママはいろんなことに悩んでいました。大人の世界の話もごまかさず、子どもに伝えようとしたから、このシリーズは今でもたくさんの人に読まれているんだと思います。(裕)



しょうかいした本への感想や、みんなに読んでほしい大好きな1さつ、夢中になっているシリーズをぜひ教えてね。

みんなの声でこのコーナーを作れたらいいなと思っています。

本をしょうかいする「本のとびら」スタート



はがきやお手紙、ファクス、メール、なんでもオッケー。

表面にある「こども記者クラブ」あてに送ってください。

次回の取材教室は

「たんけん 信濃のわざ 松本民芸家具編」

6月16日(土) 午後1時~4時

【場所】松本市中央 松本民芸家具

【講師】同社常務 池田素民さん

【定員】3人追加募集 (4年生以上)

【内容】民芸家具の歴史を聞いたり、工場を見学、職人さんに取材します。

026-236-3110へ電話を！先着順

## もし 記者じゃなかったら

英語しゃべれるオフィスレディー

子どものころにあこがれていたのは、英語がペラペラでハイヒールをはいて、カッコいいスーツを着てオフィスを歩く女性になることでした。なんでだろ〜。確かなことは忘れてしまったのですが、テレビで見るアメリカの会社で働く女性がすごくカッコよかったからだと思います。要するに、アメリカかぶれ、だった訳です。

今と違って、学校には外国人の先生もいませんし、街で外国人を見かけることも少なかった。そして英会話の学校になんて通わせてもらえなかつたので、ラジオの基礎英語を時々聞いていました。中学校では英語が一番好き。高校になると急に難しくなつた教科書と格闘し、毎日の宿題を泣きそうになりながらこなしていました。英語を必死で勉強したのは、東京に行きたい、海外に行きたい、その一心からでした。

念願がなつて東京の大学生になったものの…。英語の夢は打ち砕かれてしまいました。英語専攻だったので、回りにはアメリカで育つた人や「東大に行くはずだった」人、小さい頃から英会話学校に通っていた人な

ど。田舎の高校生がちょっと英語を頑張つた程度では勝負にならなかつたのです。大学時代はずっと落ちこぼれ学生でした。

でも、英語で仕事をする夢は捨てきれず、卒業して入社したのはアメリカの企業の日本支社。社内文書は英語という会社でした。当然、社内にはアメリカで育つたとか、アメリカの大学を卒業したとか、英語ペラペラの人ばかり。やっぱり背伸びはするものではないと思いましたが、米国の企業で働いた一年間は私の人生で貴重な経験でした。

英語ばかりの理由ではないですが、その会社をやめて、信濃毎日新聞社に入社しました。いまは英語より日本語、の仕事をしていますが、時折「スーツケースを引っ張って、出張でさっそうと海外に出掛ける私」を夢見たりします(笑)

ちいさかつどうぶ 地域活動部 部長

いのうえひろこ 井上裕子

